

中学生における相談抑制と友人関係との関連

－質問紙と動的学校画を用いての検討－

増田成美¹・石田 弓¹

The relationship between inhibiting to consult and friendship in junior high school students :
by using questionnaire and Kinetic School Drawing

Narumi Masuda ・ Yumi Ishida

These sets of studies aim to demonstrate how inhibiting consulting behavior is a feature of friendship in junior high school students. The first study divided the types of consulting behavior among friends into three groups: a “group to consult friends,” a “group without an intention to consult friends,” and a “group inhibiting consulting behavior”. Next, we examined the features of friendship in each group. Results demonstrate that junior high school students who inhibit consulting behavior are defensive toward their friends and are not confident regarding their opinions and ideas. Moreover, the results demonstrate that the same students do not make proactive efforts to reach a mutual understanding with their friends and that their desire to be loved and develop intimate friendships is low. The second study used Kinetic School Drawing to catalog the impressions and traits of friendship in each type of consulting behavior. The results suggest that junior high school students who inhibit consulting behavior are reluctant to draw scenes that depict mutual contact with friends.

Key words: help-seeking behavior, friendship, Kinetic School Drawing (KSD)

問題

1. 中学生の相談行動の抑制

悩みの対処の一つに、誰かに悩みを相談する方法がある。悩みの相談という行動は、社会心理学における援助要請行動（help-seeking behavior）の観点からこれまで研究されてきた（永井，2009）。援助要請行動とは、個人が何らかの問題を抱えたときに、問題解決の必要があり、他者が時間、労力、資源を費やしてくれるのならその問題が解決、軽減するようなもので、それを必要とする個人が他者に直接的に援助を求めることと定義されている（DePaulo,1983）。これに基づくと、相談行動

¹ 広島大学大学院教育学研究科

は援助要請行動の一形態であるということが出来る(永井・新井, 2007)。石隈・小野瀬(1997)では、中学生の悩みや相談相手についての大規模な実態調査を行った結果、38%という比較的多くの生徒が悩みを「誰にも相談しない」ことが示された。しかし、岩瀧(2008)は、「自分で解決しなければ」という意識が強く、周囲に援助を求めたり、相談したりすることを抑制してしまうとかえって成長を阻害してしまうおそれもあることを指摘している。永井・新井(2005)は、相談しない者には「そもそも相談の意図のない者」と「相談したくてもしない者」の2群が混在している可能性を示唆した。こうしたことから、「相談しない」には、問題解決において他者に相談するということを意図していない者と他者に相談したいと思っながら相談しない者とを区別する必要がある、「相談したくてもしない者」のように、援助を必要としながらも相談しない相談行動を抑制している者に支援の必要があると考えられる。さらに、小針(2008)は、悩みの相談先は相談する友人の数や親子関係の会話の時間など、周りの人間関係の在り方に規定され、悩みを相談する友人が少なければ、友人に相談する確率が少なくなること、親との会話、おしゃべりしたり悩みを相談する友人の数が多き者ほど、親や友人を相談先として選んでいる傾向があり、そのような人間関係が構築されていない者にとっては「相談先がない」ことを意味すると述べている。このことから、相談行動に至るには、相談先となる友人関係・親子関係が必要であると考えられる。

2. 中学生の相談行動と友人関係

友人は、中学生が悩みを相談する相手として最も多く選ばれる対象である(平石・小倉・安藤, 2005; 永井・新井, 2005 など)。中学生は心理的に親から離れ、同性同年代の親密な友人関係を築いて友人間で共感し合ったり、社会性を身に着けたりする時期にある。そのため、中学生が友人と上手く関係を築けているかどうかは発達においても重要な時期にあり、親ではなく友人に相談する時期にあると考えられる。つまり、友人関係が構築されているかどうかは、友人に相談できているかどうかということにも関連すると考えられる。そのため、友人に相談する中学生と相談を抑制する中学生には友人関係に違いがあると考えられる。

田中・窪田(2009)は、友人とのつきあい方に信頼感が及ぼす影響について検討し、友人とのつき合いが深く・広いタイプは自分への信頼も他人への信頼も高く、不信感も低い一方、他の3タイプ(深く・狭い、浅く・広い、浅く・狭い)は自分への信頼も他人への信頼も低く、不信が高いという結果から、信頼感が友人とのつき合い方に影響していることが示唆された。相談行動においても相談するときの抵抗感に他者不信感が関わっていることが示されている(後藤・廣岡, 2005)。このことから、友人関係と対人信頼感には関連があり、友人関係が深く・狭い、浅く・広い、浅く・狭い者は、他者一般に対する信頼感が低く、不信感があり、相談抵抗があると考えられる。

現代の中学生において、友人に相談する者がどのような友人関係を築いているのか、友人に相談することを抑制する者がどのような友人関係を築いているのか、その様相については十分に検討されていない。そこで、現代中学生の相談行動の現状を把握し、どのような友人関係を築いているのか、相談を抑制する者がどのような友人関係を築いているのかを把握することは、何らかの支援を必要としながらも、支援を得ることを抑制する中学生を把握するための一助になると考えられる。

3. 動的学校画と友人関係のアセスメント

中学生の友人関係をアセスメントする際には、投映描画法を扱うことも検討されている。動的学校画（Kinetic School Drawing：以下、KSD）とは、Prout & Philips（1974）によって開発された学校をテーマとした投映描画法であり、学校に関して語りたがらない学校不適応の子どもの言語的コミュニケーションを補い、学校イメージや学校に関するさまざまな情報が得られる（橋本，2009）。また、学校に関わる人物（自分，友人，教師）が何かをしているところを描かせることで、質問紙で測定しうる友人関係の認知よりも、さらに無意識的な水準における友人関係のイメージを捉えることができる（家成・石田，2016）。同研究では、思春期にあっては観察自我が未熟であるため、自身の内的体験を十分に自覚できなかつたり、対人関係における否定的側面を直接的に尋ねる質問項目では防衛がはたらき正確な回答が得られないおそれがあるため、質問紙と併用してKSDを用いている。これらのことから、KSDにおいて学校場面や友人のイメージと向き合うことで友人に対して相談を抑制するような言語化しづらい感情が、描画に表現されると考えられる。そこで、本研究においては相談抑制に関わる友人関係を捉える手段としてKSDを用いることにする。

KSDの先行研究によると、田中（2009）では、友人関係に葛藤を抱いている場合、同じ姿勢や同じ顔の友人像を大量に描くなど、詳細に描くことの困難さを感じて個性を表現せず描くことが示唆された。他にも田中（2009）は、顔の描画の詳細さから、自己像の顔の部分の詳細に描いている描画者ほど、学級内で安らぎや楽しさを感じていると同時に、友人と相互により親密になりたいという意識が強いことが推測されること、瞳の有無に関わらず自己像の眼を描いた描画者は、描かなかつた児童・生徒よりも友人と互いに親密になることを求める傾向があることを示唆した。家成・石田（2016）の中学生の対人的疎外感の様相を幅広く捉えるためにKSDを用いた研究では、対人的疎外感の高群は「授業」を描くことが多く、低群では「部活」が多く見られた。他にも、自己像と友人像との距離、コミュニケーションの有無、描画場面のその後の物語が扱われ、対人的疎外感の高群では、自己像と友人像との距離は近く描くが、コミュニケーションを描かない者が少なくなく、その後の物語でも人物間同士のコミュニケーションを避け、事実関係が中心の物語になりやすいことが示された。こうした結果から、友人と深く広くかかわらず、相談行動を抑制しやすい者は、友人像の個性を描かず、自己像の顔を詳細に描かないこと、自己像と友人像の距離を近く描いても、コミュニケーションをしているような表現が描かれず、「授業」のような他者との交流のない場面を描き、事実関係が中心の物語になりやすいことが考えられる。そこで本研究では、KSDを用いて中学生の相談行動ごとの描画表現を比較して、相談行動ごとの友人関係を把握することができるかを検討することとした。特に、相談を抑制する者のKSDにはどのような描画特徴があるかを検討する。

相談行動と友人関係との関連（研究1）

目的

現代中学生の相談行動と友人関係の関連を明らかにするために、質問紙を用いて友人に対する相談行動ごとの友人とのつきあい方を比較して、「相談する者」、「そもそも相談の意図のない者」、「相談する者」の友人関係の特徴を明らかにすることを目的とする。

方法

調査対象 A 県の公立 B 中学校に通学している生徒 339 名、公立 C 中学校に通学している生徒 130 名の合計 469 名を対象とした。

調査実施時期 公立 B 中学校では、2017 年 11 月下旬、公立 C 中学校では、2017 年 12 月上旬に実施した。いずれも中学校を通して、調査実施可能な教員が各学年各クラスで質問紙と描画を配布して行う形式をとった。

調査手続き KSD と質問紙を配布し、KSD を実施した後の 15 分間で質問紙に回答させた。

調査内容 中学生の悩みの経験が多く、相談しない者が多いものの友人に相談することに対して「ポジティブな効果」が予期される場合に相談行動が促進される「心理・社会的悩み」11 項目（石隈・小野瀬，1997）を相談内容とした。そのうち、悩んだ経験が少ないとされる「委員会や班活動で悩みがある」という項目を省いた「心理・社会的悩み」10 項目（新見・近藤・前田，2009）に対して、友人に「相談する」、「そもそも相談の意図がない」、「相談したくてもしない」の 3 件で尋ね、群分けを行うこととした。

相談行動の群分け 「相談する」に多く○をつけた生徒を友人によく相談する傾向のある者として『相談群』、「そもそも相談の意図がない」に多く○をつけた生徒をそもそも友人に相談する意図がない傾向のある者として『意図なし群』、「相談したくてもしない」に多く○をつけた生徒を友人に相談したくてもしない傾向のある者として『抑制群』の 3 群に分類した。

友人とのつきあい方尺度 友人関係を判別するにあたり、落合・佐藤（1996）の「友達とのつきあい方尺度」35 項目について「ほとんどあてはまらない（1 点）」から「かなりあてはまる（5 点）」までの 5 件法で評定を求めた。本尺度は、以下の 6 つの交友尺度からなる。①防衛的交友尺度（本音を出さない自己防衛的なつきあい方）は、「友達とは本音で話さない方が無難だ」、「友達に自分のすべてをさらけ出すのは危険である」などの 13 項目。②自己自信的交友尺度（自分に自信を持って交友する自立したつきあい方）は、「友達と対立しても、自信をなくさないで話しあえる」、「友達と本音でぶつかりあっても、自信をなくしてしまうことはない」などの 6 項目。③積極的相互理解的交友尺度（自己開示積極的に相互理解しようとするつきあい方）は、「友達とは少しくらい傷ついても本当のことを言い合いたい」、「友達と本当の姿を見せ合うことで、少しくらい傷ついてもかまわない」などの 4 項目。④全方向的交友尺度（誰とでも仲良くしていきたいというつきあい方）は、「どんな友達とも仲良しでいたい」、「どんな人ともずっと友達でいたい」などの 6 項目。⑤同調的交友尺度（みんなと同じようにしようとするつきあい方）は、「みんなと違うことをしたくない」、「みんなと意見を合わせようと思う」などの 4 項目。⑥被愛願望的交友尺度（みんなから好かれることを願っているつきあい方）は、「みんなから愛されたい」、「みんなに好かれていたい」の 2 項目。交友関係の深い—浅いにかかわる「防衛的交友尺度」、「自己自信的交友尺度」、「積極的相互理解尺度」の合計得点と交友関係の広い—狭いにかかわる「全方向的交友尺度」、「同調的交友尺度」、「被愛願望的交友尺度」の合計得点を相談行動の「相談する者」、「そもそも相談の意図のない者」、「相談したくてもしない者」とで比較する。

結果

分析対象 分析には、質問紙への回答に不備があったものを除いた計 460 名（1 年生 145 名＜男子 75 名，女子 69 名，性別無記入 1 名＞，2 年生 186 名＜男子 93 名，女子 92 名，性別無記入 1 名＞，3 年生 129 名＜男子 73 名，女子 55 名，性別無記入 1 名＞）のデータを使用した。相談行動の群分けによって，相談群 146 名，意図なし群 275 名，抑制群 39 名となった。このことから，中学生の過半数が友人に対して相談する意図がないことが示された。

友達とのつきあい方尺度 友達とのつきあい方尺度について 35 項目について探索的因子分析を行った。本来 6 因子構造であるため，6 因子構造を指定して分析を行った。その結果，「友達とは何でも本音で話し合うようにしている」，「少しくらい傷つくことがあっても，自分のありのままの姿で接したい」，「友達に自分を理解してもらえないと自信がもてない」，「みんなと意見が違っててもできるだけ言うようにしている」の 5 項目の負荷量が 0.3 未満であったため除外し，再度最尤法・プロマックス回転による因子分析を行い，6 因子を抽出した。各因子は，6 因子でまとめ， α 係数は「防衛的交友尺度」 $\alpha=.88$ ，「自己自信的交友尺度」 $\alpha=.89$ ，「積極的相互理解の尺度」 $\alpha=.82$ ，「全方向的交友尺度」 $\alpha=.91$ ，「同調的交友尺度」 $\alpha=.78$ ，「被愛願望的交友尺度」 $\alpha=.96$ であり，十分な内的整合性が確認された。また，「友達とのかかわり方に関する姿勢尺度」と「自分がかかわろうとする相手の範囲尺度」の 2 因子の内的整合性を確かめるため，確認的因子分析を行ったところ，「友達とのかかわり方に関する姿勢尺度」で $\alpha=.89$ ，「自分がかかわろうとする相手の範囲尺度」で $\alpha=.86$ と十分な値が得られた。

相談行動と友人関係の関連 相談行動（相談群・意図なし群・抑制群）を独立変数，友達とのつきあい方尺度の交友関係の深い－浅いにかかわる「防衛的交友尺度」，「自己自信的交友尺度」，「積極的相互理解的交友尺度」の 3 つ合計得点で構成した「友達とのかかわり方に関する姿勢」を従属変数とする 1 要因分散分析を行った。その結果，相談行動の主効果が見られ ($F(2, 434) = 22.65$, $p < .01$)，多重比較の結果，相談群が他の 2 群に比べて有意に得点が高いこと，意図なし群は，相談群に比べて有意に低く，抑制群は他の 2 群に比べて有意に得点が高いことが示された。以上のことから，相談群は，他の 2 群に比べて，友人と深くかかわろうとすること，意図なし群は，相談群に比べて友人とのかかわりが浅く，抑制群よりも深くかかわろうとしていること，抑制群は他の 2 群に比べて友人とのかかわりが浅いことが示された。

対象者全体の自分の関わろうとする相手の範囲の尺度得点の平均値と標準偏差 ($M=36.69$, $SD=8.64$) を求めた。相談行動（相談群・意図なし群・抑制群）を独立変数，友達とのつきあい方尺度の交友関係の広い－狭いにかかわる「全方向的交友尺度」，「同調的交友尺度」，「被愛願望的交友尺度」の 3 つ合計得点で構成した「自分がかかわろうとする相手の範囲」を従属変数とする 1 要因分散分析を行った。その結果，相談行動の主効果が見られ ($F(2, 449) = 4.005$, $p < .05$)，多重比較の結果，相談群が他の 2 群に比べて有意に得点が高いことが示された。以上のことから，相談群は意図なし群に比べて，友人と広く関わろうとすること，意図なし群は相談群に比べて，友人とかわる範囲が狭いことが示された。

そこで，次に「友達とのつきあい方尺度」の 6 因子からなる下位尺度の得点を比較することで，「防衛的交友尺度」，「自己自信的交友尺度」，「積極的相互理解的交友尺度」，「全方向的交友尺度」，

Table 1
相談行動と各下位尺度得点の要約統計と分散分析の結果

尺度	相談群		意図なし群		抑制群		F値	p値	多重比較
	N	平均値(SD)	N	平均値(SD)	N	平均値(SD)			
防衛的	141	25.16(8.18)	267	30.13(9.41)	39	35.71(9.07)	25.73	.000 **	抑制群>意図なし群>相談群
自己自信的	142	17.58(4.88)	270	17.47(5.15)	39	13.92(4.29)	9.18	.000 **	相談群≒意図なし群>抑制群
積極的相互理解的	146	13.98(3.81)	272	12.46(3.78)	39	12.28(3.17)	8.45	.000 **	相談群>意図なし群≒抑制群
全方向的	144	22.04(6.06)	271	20.19(6.25)	39	20.56(5.90)	4.26	.015 *	相談群>意図なし
同調的	146	7.93(2.69)	273	8.05(3.20)	39	8.74(2.70)	1.11	.32 ns	
被愛願望的	146	7.48(2.00)	275	6.66(2.39)	39	6.23(2.62)	7.83	.000 **	相談群>意図なし群≒抑制群

* $p<.05$, ** $p<.01$

「同調的交友尺度」, 「被愛願望的交友尺度」のどの項目に平均値の差が見られるかを検討した。それぞれの群ごとの平均値と標準偏差を求め、相談行動と各下位尺度得点に対する分散分析を行った (Table 1)。その結果、友人とのかかわり方に関する尺度の下位尺度である「防衛的交友尺度」, 「自己自信的交友尺度」, 「積極的交友尺度」において、相談行動ごとの3尺度の得点に有意な差が見られた (Table 1)。また、多重比較の結果、防衛的交友尺度の得点は、相談群、意図なし群、抑制群の順に有意に低いこと、自己自信的交友尺度の得点は、抑制群が、相談群、意図なし群に比べて有意に低いこと、積極的相互理解的交友尺度では、相談群が意図なし群、抑制群に比べて有意に高いことが示された (Table 1)。自分のかかわろうとする相手の範囲に関する尺度の下位尺度である「全方向的交友尺度」, 「同調的交友尺度」, 「被愛願望的交友尺度」においては、相談行動ごとの「全方向的交友尺度」と「被愛願望的交友尺度」の得点に有意な差が見られた。同調的交友尺度では有意な差が見られなかった。また、多重比較の結果、全方向的交友尺度の得点は、相談群が意図なし群、抑制群に比べて有意に高く、被愛願望的交友尺度の得点は、相談群が意図なし群、抑制群に比べて有意に高かった (Table 1)。

以上より、相談群は、友人に対して防衛的ではなく、自分の考え方や意見に自信を持ち、積極的に相手を理解しようとしたり、自分を理解してもらおうとしたりするような深いかかわりを持ち、どのような友人とも仲良くしたいという思いや誰からも愛されたいという願望が強く、幅広く友人とかかわろうとする傾向があることが示された。意図なし群は、相談群に比べると友人に対してやや防衛的で、自分の考え方や意見に自信を持ち、積極的に互いを理解し合おうとする意欲が低く、どのような友人とも仲良くするのではなく、誰からも愛されたいという願望は低いことが示された。抑制群は、友人に対して防衛的で、自分の考え方や意見に自信が持てず、積極的に互いに理解し合おうとする意欲が低く、どのような友人とも仲良くするのではなく、誰からも愛されたいという願望は低いことが示された。

考察

本研究では、中学生の相談行動と友人関係との関連を検討するため、相談する生徒 (相談群)、そもそも相談の意図のない生徒 (意図なし群)、相談したくてもしない生徒 (抑制群) のそれぞれの友人とのつきあい方を調査した結果、それぞれの群で友人とのつきあい方に特徴が見られた。相談群は、友人に対して防衛的ではなく、自分の考え方や意見に自信を持ち、友人と深い・広いかかわりをもつ傾向があることが示された。したがって、友人に相談する者は、自分にも他人にも信頼があり、相手に自分の意見や考え方を伝えるなど、互いに分かり合おうとする関係を築いていること

が考えられる。田中・窪田（2009）によれば、友人とのかかわりが深い・広いタイプは、他人も信頼できる存在であると感じ、裏切られることや裏切ることはないと思い、自分が欲しい評価を周りから受けて、自分への信頼だけでなく他人をも信頼できるようになることが示唆された。相談群も深い・広いタイプに属することが示され、自分への信頼と他人への信頼が高く、他人に裏切られたり、自らが裏切るようなことはないという思いが友人を信頼することに繋がり、さらに相談行動にもつながっていることが推察される。

意図なし群は、どのような友人とも仲良くしたいということではなく、誰からも愛されたいという願望も低いことから、友人との関わりは狭いことが示された。意図なし群と抑制群の違いは、防衛的交友尺度と自己自信的交友尺度の得点の差にあった。意図なし群は、抑制群ほど友人に防衛的ではなく、自分の考え方や意見に自信を持っていることが示された。天貝（1999）によれば、自分への信頼に影響を及ぼす要因に「承認経験」があり、仲間からの承認や大人からの承認の経験が自分への信頼感に影響していることが示されている。このことから、意図なし群は友人や大人からの承認の経験があると推察される。そのため、意図なし群は、自分に自信を持ち、誰とでも仲良くしたい、誰からも愛されたいという思いはなく、友人に対して防衛的でありながらも、限定的な友人関係を築く力はあることが考えられる。また、意図なし群は自分の考え方や意見に自信があることで、問題は友人に相談するのではなく自分で解決するという意欲があると考えられる。

抑制群は、相談群や意図なし群に比べて防衛的で、自己自信的尺度得点が有意に低かったことから、自分への信頼も他人への信頼も低く、自分を肯定的に受け止めることもできず、積極的に自己開示することができなかつたり、他人に対して裏切られることを恐れたり、疑り深くなっていることが考えられる。このことから、抑制群は、田中・窪田（2009）の友人とのかかわり方が浅い・狭いタイプと考えられる。同研究によれば、友人とのかかわり方が浅いタイプや狭いタイプは、「深い・広い」タイプに比べ、自分への信頼も他人への信頼も低く、不信があることを示された。また、こうしたタイプは、人から裏切られることを恐れたり、人に対して疑り深くなっていることを示唆された。

相談行動と動的学校画（研究2）

目的

研究1より、相談行動の違いによって、友人関係の特徴にも違いがあることが示された。研究2では、相談行動ごとの友人関係を把握するため、各群のKSDにどのような描画特徴が見られるかを検討すること、また、相談を抑制する者に顕著な描画特徴は何かを検討することを目的とした。

方法

調査手続き 調査対象は、研究1と同様。KSDは集団実施が可能であり（Prout & Philips, 1974）、調査は研究2で扱うKSDも併せて、学級単位の集団法で実施した。担当教員が封筒に入れた質問紙や画材（A4判白画用紙、B鉛筆、消しゴム）を配布し、15分間でKSDと「描画後の質問」を実施した。

調査内容 「あなたが学校で何かしているところを描いてください。その絵の中にあなたとあなたの先生、そして2人以上のお友達を描いてください。人物全体をできるだけ丁寧に描いてください。終わったら、描いた人が誰なのかわかるように、人のすぐ横に「自分」、「先生」、「友達」などと書いてください。」という教示などを記載した。また、描画だけでは、誤った理解や評価がなされる危険があり（田中，2009）、「描画後の質問」として、『絵についての説明』の欄を設定し、「①この絵の人はそれぞれ何をしているところですか」と「②この場面の後、どのようなことが起こりますか（その後の物語）」は、自由記述で回答させた。本邦におけるKSDの基礎的研究は少なく、田中（2007，2009）が、O'Brien & Patton（1974）のKSDの客観的スコア基準（Objective Scoring Criteria for KFD Variables）の一部項目と、Prout & Celmer（1984）の設定したKSDのための8つの評価項目を参考に（Knoff & Prout，1985 加藤・神戸訳 2000），作成したスコアリング基準を作成している。しかし、このスコアリングには改善の余地があると言われているため、本研究では、田中（2009，2011），家成・石田（2016）のスコアリング基準を参考にしながら、現代中学生の相談行動と友人関係のアセスメントに有用と思われる描画指標を抽出しスコアリング基準を作成した（Table 2）。

結果

本研究で設定したスコアリング基準（Table 2）に沿って、描画指標ごとに描画特徴を評定した。そのうえで、相談行動の群ごとにKSDの描画特徴に違いが見られるかどうかを検討するため、 χ^2 検定を行った（データ数が小さく、 χ^2 検定が適切でない場合は、正確確率検定を行った）。また、「友人像の数」と「自己像と友人像の距離」については、量的データであるため、相談行動の群ごとに数量に差が見られるかを検討するため分散分析を行った。本研究では、描画の完成度を指標に設定したため、未完成の描画も分析対象に含めた。

完成度 460名（相談群 146名，意図なし群 275名，抑制群 39名）を分析対象とした。 χ^2 検定の結果，有意差が見られた（ $\chi^2=12.96(df=4, N=460)$ ， $p<.05$ ）。残差分析によると、「人物像なし」は相談群が有意に少なく（2.0%），抑制群に有意に多い（15.3%）ことが示された。

人物像の描き方 人物像が描かれなかったものを除いた439名（相談群 144名，意図なし群 262名，抑制群 33名）を分析対象とした。 χ^2 検定の結果，有意傾向が見られた（ $\chi^2=5.41(df=2, N=439)$ ， $p<.10$ ）。残差分析によると，相談群は人物像を「具体的」に描く者が多く（84.7%）（Figure 1），「記号的」に描く者が少ない（15.2%）傾向が見られた。意図なし群においても198名（75.5%）は人物像を具体的に描いていたが（Figure 2），人物像を「記号的」に描く者も比較的が多い（24.4%）ことが示された。

自己像の顔 自己像が描かれた403名（相談群 131名，意図なし群 239名，抑制群 33名）を分析対象とした。 χ^2 検定の結果，有意傾向が見られた（ $\chi^2=9.46(df=4, N=403)$ ， $p<.10$ ）。残差分析によると，相談群は自己像の顔を「完全」に描く者が意図なし群より有意に多い傾向にあった（相談群 48.0%，意図なし群 32.6%，抑制群 36.3%）。自己像の顔を描かない「顔なし」は意図なし群が，相談群より有意に多い傾向にあった（相談群 32.0%，意図なし群 45.6%，抑制群 39.3%）。しかし，意図なし群，抑制群ともに自己像の顔を「完全」に描いた者が，意図なし群 78名（32.6%），抑制

Table 2

本研究で使用したKSDのスコアリング基準

描画指標	基準
①完成度	描画なし・消し跡・人物像なし／人物像あり(自己像・友人像・教師像のうち1人あるいは2人)／自己像と友人像と教師像がそれぞれ描かれている
②人物像の描き方	記号的／具体的 ▶ 記号的とは、輪郭線だけの人物像や棒状の人物像 (Stick Figure) など、具体性を欠くもの。
③自己像の有無	なし／あり ▶ なしとは、描画に「自分」と示されていないもの、記述からも確認できないもの。 ▶ ありとは、描画に「自分」と示されているもの、記述から自己像を確認できるもの。
④友人像の有無	なし／あり ▶ なしとは、描画に「友人」と示されていないもの、記述からも確認できないもの。 ▶ ありとは、描画に「友人」と示されているもの、記述から自己像を確認できるもの。
⑤自己像の顔	顔なし(頭なし・後ろ姿・顔パーツなし)／顔あり
⑥友人像の顔	顔なし(頭なし・後ろ姿・顔パーツなし)／顔あり
⑦自己像の表情	顔なし(頭なし・後ろ姿・顔パーツなし)／表情なし(無表情)／表 ▶ 眼や口で笑顔などの表情が示されているもの。
⑧友人像の表情	顔なし(頭なし・後ろ姿・顔パーツなし)／表情なし(無表情)／表 ▶ 眼や口で笑顔などの表情が示されているもの。
⑨表情の違い	なし／あり ▶ 2人以上の人物像が描かれ、その表情に違いがあるもの。
⑩友人像の数	絵の中に「友人」と示されている人物像の数。記述から友人であると分かるものも含めた。
⑪自己像と友人像の距離	自己像の頭頂と自己像に最も近い友人像の頭頂との距離を測った。
⑫コミュニケーションレベル	自己像からのコミュニケーションのないもの(自己像は眠っている・自己像は何かを見ているだけ・自己像は何かから発せられる声、音を聞いている)／自己像は誰かに対して話しかけている、あるいは誰かと話している／誰かと一緒に遊んでいる／誰かの体に触っている、触れている ▶ 描画と記述の両方を参考にスコアリングを行った。 ▶ 本研究においては、一緒に運動している、一緒に歌を歌っている、一緒に食べているというものを「誰かと一緒に遊んでいる」に含めた。
⑬協力レベル	他者像との協力関係なし(自己像と他者像の協力関係は見られない・自己像のみが1人で動いている、働いている)／自己像か他者像の誰かが誰かを助けている／自己像と他者像が誰かと一緒に遊んでいる(休憩時間・体育も含まれる)／自己が他者と動いている、働いている ▶ 描画と記述の両方を参考にスコアリングを行った。
⑭相談行動	相談行動なし／相談行動あり ▶ 相談行動あり：教師像から授業以外の指導を個人または友達集団で受けているもの。自己像が友人に教えている、教えられているもの。 ▶ 記述の両方を参考にスコアリングを行った。
⑮場面	授業／給食・掃除／休憩／部活・スポーツ／その他
⑯その後の物語	何も起きない／ネガティブ／中性／ポジティブ ▶ 何も起きない：特になにもない、何も起きないと変化がないことが記述されているもの。 ▶ ネガティブ：失敗や情緒的な苦痛などの表現がなされているもの。不幸な出来事や怪我や事故、被害に遭うことが記述されているもの。 ▶ 中性：「授業が始まる」や「いつも通りの生活」などの事実関係が記述されたもの。 ▶ ポジティブ：何かができるようになったり、よい結果が得られたことが文章ではっきり書かかれているもの。情緒表現があるもの。

群 (36.3%) と「顔なし」で描いた者と同程度存在した。

友人像の顔 友人像が描かれた 398 名 (相談群 132 名, 意図なし群 232 名, 抑制群 34 名) を分析対象とした。 χ^2 検定の結果, 有意差は見られなかった ($\chi^2=7.28$ ($df=4$, $N=398$), $n.s.$)。相談群, 抑制群は「完全」に描く者 (Figure 1, 3) が多く (相談群 43.9%, 意図なし群 30.6%, 抑制群 41.1%), 意図なし群は「顔無なし」が多く見られた (相談群 34.8%, 意図なし群 45.2%, 抑制群 35.2%) が, 差はないことが示された。

自己像の表情 自己像が描かれた 403 名 (相談群 131 名, 意図なし群 239 名, 抑制群 33 名) を分析対象とした。 χ^2 検定の結果, 有意差が見られた ($\chi^2=16.84$ ($df=4$, $N=403$), $p<.01$)。残差分析によると, 自己像の「表情あり」は相談群に有意に多く, 意図なし群が有意に少なかった (相談群 64.1%, 意図なし群 43.9%, 抑制群 48.4%)。自己像の「表情なし (無表情)」は, 相談群に有意に少なかった (3.8%)。「顔なし」は意図なし群に多く, 109 名 (48.5%) が「顔なし」であったが, 「表情あり」も 108 名 (44.1%) 見られたことから, 意図なし群では, 顔を描かない者と顔を描き, 表情も描い

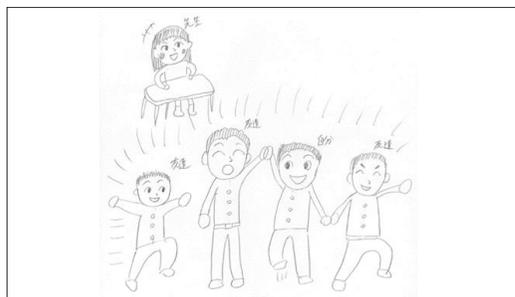


Figure 1. 相談群のKSD



Figure 2. 意図なし群のKSD

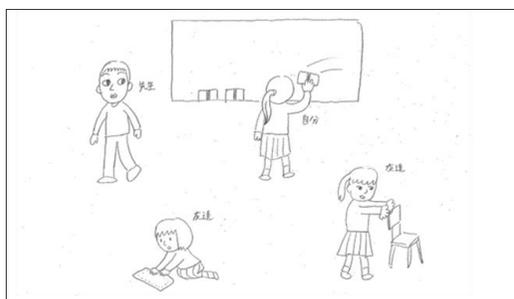


Figure 3. 抑制群のKSD

ている者とが同程度見られた。抑制群においても、自己像の「顔なし」12名（36.3%）、16名「表情あり」（48.4%）で自己像の顔を描いた者では表情を描く者が多く、「顔なし」と同程度多いことが示された。

友人像の表情 友人像が描かれた398名（相談群132名、意図なし群232群、抑制群34名）を分析対象とした。 χ^2 検定の結果、有意傾向が見られた（ $\chi^2=9.37(df=4, N=398), p<.10$ ）。残差分析によると、友人像の「表情あり」（Figure 1）は相談群に多く、意図なし群に有意に少なかった（相談群61.3%、意図なし群46.5%、抑制群55.8%）。しかし、意図なし群においては、友人像の「顔なし」109名（45.2%）、「表情あり」108名（46.1%）より、友人像の「表情あり」も同程度存在することが示された。

表情の違い 自己像と他者像の描かれた402名（相談群132名、意図なし群231名、抑制群34名）を対象とした。 χ^2 検定の結果、有意差が見られた（ $\chi^2=16.59(df=4, N=402), p<.01$ ）。残差分析によると、表情の違い「あり」（Figure 1）は相談群に有意に多く見られ、意図なし群に有意に少なかった（相談群49.2%、意図なし群34.2%、抑制群32.3%）。表情の違い「なし」（Figure 2）は意図なし群に有意に多く、相談群に有意に少なかった（相談群50.7%、意図なし群65.8%、抑制群67.6%）。

友人像の数 人物像が描かれなかったものと人物像の説明がなかったものを省いた406名（相談群131名、意図なし群242名、抑制群33名）を対象とした。対象者全体のKSDの友人の数の平均値は2.50、標準偏差は2.17であった。各群の平均値、標準偏差は、相談群（ $M=2.54, SD=1.82$ ）、意図なし群（ $M=2.47, SD=2.34$ ）、抑制群（ $M=2.57, SD=2.19$ ）であった。相談行動（相談群・意図なし群・抑制群）を独立変数、友人の数を従属変数とする1要因分散分析を行った結果、相談行動と友人の数に有意差は見られなかった（ $F(2,403)=0.065, n.s.$ ）。

自己像と友人像の距離 自己像と友人像の描かれたもの 372 名（相談群 127 名，意図なし群 261 名，抑制群 32 名）を対象とした。対象者全体の自己像と友人像の距離の平均値は 5.92，標準偏差は 3.48 であった。各群の平均値，標準偏差は，相談群 ($M=5.66$, $SD=3.12$)，意図なし群 ($M=6.21$, $SD=3.77$)，抑制群 ($M=4.99$, $SD=2.38$) であった。相談行動（相談群・意図なし群・抑制群）を独立変数，自己像と友人像の距離を従属変数とする 1 要因分散分析を行った結果，相談行動と自己像と友人像の距離に有意差は見られなかった ($F(2,372)=2.262$, $n.s.$)。

コミュニケーションレベル 自己像と分かるものと他者像の描かれたもの 414 名（相談群 133 名，意図なし群 249 名，抑制群 32 名）を対象とした。今回，田中（2011）のコミュニケーションレベルにおける「誰かの身体に触っている触れている，誰かをつかまえている」を描いたものは少なく期待度数がどの群においても 5 未満となったため，絵の内容と記述とを併せて考慮し，「一緒に遊んでいる」に含めることとした。 χ^2 検定の結果，有意な差が見られた ($\chi^2=19.14(df=4$, $N=414$), $p<.01$)。

残差分析によると，「誰かと一緒に遊んでいる・誰かの身体に触っている，触れている」は，相談群に有意に多く，抑制群に有意に少なかった（相談群 37.5%，意図なし群 23.6%，抑制群 9.3%）。相談群には，自己像と友人像のコミュニケーションのある描画が見られた。また，「自己像からのコミュニケーションのないもの（自己像は眠っている・自己像は何かを見ているだけ・自己像は何かから発せられる声や音を聞いている）」は，意図なし群，抑制群に有意に多く，相談群に有意に少なかった（相談群 29.3%，意図なし群 47.3%，抑制群 56.2%）。抑制群は半数以上（56.2%）が他者像とのコミュニケーションを描かないことが示された。一方，意図なし群は「自己像からのコミュニケーションなし」が 118 名（47.3%）に対し「自己像は誰かに対して話しかけている，あるいは誰かと話している」が 72 名（28.9%），「誰かと一緒に遊んでいる，誰かの身体に触っている・触れている」が 59 名（23.6%）より，131 名（52.6%）が他者とコミュニケーションをしている場面を描いていた。相談群においては，94 名（70.6%）が他者とコミュニケーションをしている場面を描いていた。

協力レベル 自己像と他者像が描かれているもの 414 名（相談群 133 名，意図なし群 249 名，抑制群 32 名）を対象とした。期待度数 5 未満のセル 20% 以上であったため，Fisher の直接確率検定を行った結果，有意傾向は認められなかった。

相談行動 自己像または他者像の描かれているもの 428 名（相談群 135 名，意図なし群 261 名，抑制群 32 名）を対象とした。 χ^2 検定の結果，有意差は見られなかった ($\chi^2=3.59$ ($df=2$, $N=428$), $n.s.$)。相談行動をしている描画はほとんど見られず，一部であった（相談群 7.4%，意図なし群 3.0%，抑制群 6.2%）。

場面 描画があり，場面についての記述のあるもの 436 名（相談群 141 名，意図なし群 262 名，抑制群 33 名）を対象とした。 χ^2 検定を行った結果，有意傾向が見られた ($\chi^2=13.39(df=8$, $N=436$), $p<.10$)。残差分析によると，抑制群において，「部活・スポーツ」の場面を描くことが少なく（0.0%），「給食・掃除」を描くことが多い（Figure 3）傾向が示された（相談群 5.6%，意図なし群 5.3%，抑制群 15.1%）。

その後の物語 描画があり，その後の物語についての記述のあるもの 432 名（相談群 134 名，意

図なし群 264 名, 抑制群 34 名)を対象とした。 χ^2 検定を行った結果,有意差が見られた($\chi^2=28.53(df=6, N=432), p<.01$)。残差分析によると,その後の物語を「ポジティブ」に想定するものは,相談群に有意に多く(38.81%),意図なし群に有意に少ない(17.80%)ことが示された。「中性」は相談群に有意に少なかった(相談群 53.37%,意図なし群 62.88%,抑制群 70.59%)。「ネガティブ」は,意図なし群に有意に多く(15.15%),相談群に有意に少なかった(5.97%)。しかし,対象者の過半数が対象者の過半数 262 名(60.09%)が「中性」であり,相談群 72 名(53.73%),意図なし群 166 名(62.88%),抑制群 24 名(70.59%)で,ほとんどが事実関係に基づいた回答であった。

考察

相談群 人物像が「具体的」に描かれ,自己像や友人像の表情や表情の違い,コミュニケーションのある場面を描き,「その後の物語」をポジティブに想定することが示された。高橋(2011)によれば,輪郭線だけの人物像は,自己防衛的な態度を示すこともあれば,人間関係に不安感を抱いたり,自己概念が形成されず,他者への敵意や人間関係の回避を表す可能性があることから,人物像を「具体的」に描く相談群は,他者に防衛的ではなく,人間関係に対する不安感が低く,自己概念が形成されていることが推察される。田中(2009)では,顔の描画の詳細さと「友達への要求的親密性」,「友達との自発的親密性」,「教室でのリラックス」に有意差が見られた。自己像の顔を省略せずに描く者は,学級内で安らぎや楽しさを感じていると同時に,友達と相互により親密になりたいという意識が強いことが推測された。このことから,相談群は,学級内における安心感が高く,友人と親密になりたいという意識が強いと推察される。加藤(1999)では,感情と関連の深い表情を描くことは,他者の内面や他者との情緒的交流に関心があることが示唆されており,友人像の「表情あり」が多い相談群は,友人との情緒的交流に関心があり,友人に対する抵抗が少ないことが推察される。相談群は,表情の違い「あり」が多いことが示され,自他の感情や心理状態を意識しているため KSD に自他の違いや個性が描かれることが推察される。また,相談群は 7 割以上がコミュニケーションのある場面を描き,他者像と一緒に遊び,触れあっている場面(Figure 1)を描く傾向が他の群よりも高く,永井・新井(2007)では,友人への相談行動の結果の「ポジティブな効果」の予期や,学校場面における対人関係を中心としたポジティブな経験が,相談実行の利益などの期待を高め,相談行動を促進していることが示唆された。このことから,相談群は,学校場面における対人関係を中心としたポジティブな経験が多く,「その後の物語」においてもポジティブな未来を予期するものと考えられる。

意図なし群 意図なし群の過半数(198 名)は人物像を「具体的」に描いたが,「記号的」で棒状の人物像や輪郭線のみ的人物像が他の群よりも有意に多く,人物像の顔を詳細に描かず,表情に違いがないことが多かった。また,他者とのコミュニケーションのある場面を描く者が半数以上で,「その後の物語」をネガティブに想定する者が有意に多かった。このことから,意図なし群の過半数は他者に防衛的ではない一方,「記号的」な人物像を描く者は防衛的で,人間関係に不安感が高い傾向があると推察される。学級内で安らぎや楽しさを感じたり,友人と相互により親密になりたい意識が相談群に比べると少ないことも考えられる。意図なし群においては,友人像の「顔なし」と「表情あり」とが同程度存在することが示されたことから,友人との情緒的交流に不完全感,抵抗を抱

いている者と友人との情緒的交流に関心があり、友人に対する抵抗が少ない者とが混在していると考えられる。半数以上もコミュニケーションのある場面を描いていたことから、他者とコミュニケーションが取れており (Figure 2)、友人に相談する意図はないが、学校関係者や保護者に相談している可能性があると考えられる。「その後の場面」におけるネガティブな想定からは、学校場面における対人関係を中心としたポジティブな経験が相談群に比べて少ない傾向があり、KSD でもネガティブな未来を予期しやすいことが示唆された。

抑制群 「人物像なし」が抑制群に有意に多いことから、抑制群は、KSD において自己像や友人像など人物像等を描くことに防衛的であったと考えられる。橋本 (2009) は、KSD の事例において、人物像が描かれなかったことについて、描画者の孤立の享受、対人交流を避け、自信を喪失し、対人不信があることを示唆した。また、Sarbaugh (1982) では、「KSD において人物像が描かれていない場合、おそらく社会的な相互作用からの逃避である」と述べられている。このことから、抑制群は、自分に自信が持てず、対人不信があり、社会的相互作用から逃避的で、対人関係においても回避的であるため描画に至らなかったことが推察される。また、「誰かと一緒に遊んでいる・誰かの身体に触っている、触れている」描画表現が有意に少なく、コミュニケーションのない描画が半数以上みられた。家成・石田 (2016) は、対人的疎外感が高い生徒は KSD で人物像同士のコミュニケーションが乏しい傾向にあり、KSD でも自己像と友人像のコミュニケーション場面を表すことに無意識的な抵抗や困難を感じやすいことを示唆していることから、抑制群は、自己像と友人像が一緒に遊んでいる場面や触れあっている場面を描くことに無意識的な抵抗や困難を感じやすいことが推察される。「給食・掃除」を描くことが多く、友人と遊んでいる場面では触れあう場面を描くことが少なかったことから、「部活・スポーツ」のような友人と協力し合う場面や共に活動する場面を描くことに抵抗があったことが考えられる。

総合考察

本研究の成果

研究 1 の成果は、「相談する者」、「そもそも相談の意図のない者」、「相談する者」の 3 者の友人関係の特徴の違いが見られたことにある。また、中学生の過半数が心理・社会的悩みを友人に相談する意図がないことが示された。相談しないことは、他者に頼らず自らで問題を解決しようとする「自助努力」(永井・新井, 2007) があるという可能性があり、「そもそも相談の意図のない者」は自分の考えや意見に自信を持っていることから、自分で考え解決しようという意欲を有していることが推察される。また、友人への相談を意図していないが、親や教師への相談を意図はあった可能性も考えられる。一方、「相談したくてもしない」という抑制群については、友人に対して防衛的で、自分の考え方や意見に自信が持てないこと、積極的に互いに理解し合うことを恐れ、どのような友人とも仲良くし、愛されたいという願望が低いことから、友人への相談行動が抑制され問題を維持しやすくと考えられる。意図なし群と抑制群は、どちらも友人に相談しない傾向が見られるため、親にも相談しない可能性や誰にも相談しない可能性を考慮しておく必要がある。そのため、中学生の

相談行動と友人関係を把握しておくことが支援の糸口となると考えられる。

研究2では、相談行動ごとの友人関係を把握するため、各群のKSDにどのような描画特徴が見られるか検討すること、相談を抑制する者に顕著な描画特徴は何か検討するという目的に対して、「相談する者」、「そもそも相談の意図のない者」、「相談したくてもしない者」の3者それぞれに特徴的な描画表現があることが示された。KSDで示された描画表現の特徴には違いが見られ、KSDにおいても「相談する者」は、友人とふれあう場面を描き、親密になりたい意欲をもつことが推察され、「そもそも相談の意図のない者」は、友人とふれあう場面を描きながらも、顔を描かないなどの友人に対して防衛的な表現も描くことが示された。特に、抑制群は友人に対して防衛的で、親しい友人関係を描くことへの抵抗が覗えた。以上より、KSDは、相談行動ごとの友人関係の特徴を捉えることに役立つことが示唆された。

今後の課題

本研究における相談行動の群分けは、永井・新井（2005）の「相談しない者」には「そもそも相談の意図のない者」と「相談したくてもしない者」が混在しているという指摘をもとに筆者らが独自で行った群分けである。本来、援助要請行動は、高木（1997）の援助要請行動の生起過程モデルにおいて、問題への気づきから個人が問題解決能力の査定を行った時、自身に問題解決能力ない場合に援助者を探求するという過程から実行される。しかし、本研究では、個人がその問題を経験したかどうかという過程を省き、悩みを抱えたら相談するかどうかという仮定を含めて群分けを行ったため、相談行動の抑制を扱う際には、援助要請行動の生起過程モデルにそって相談行動の抑制の扱いについて再度検討する必要があると考えられる。さらに、本研究では、悩みの種類を「心理・社会的悩み」に限定したこと、相談相手を友人に限定して調査を行ったことから、相談行動の抑制について検討する場合は、「心理・社会的な悩み」以外の悩みの項目や友人以外の相談対象を用いて調査する必要がある。一方、KSDでは、抑制群に特有の描画指標を求めめるためには、抑制群の母数を増やすことが求められる。また本研究では、田中（2007, 2009）や家成・石田（2016）のスコアリングを参考に、中学生の相談行動と友人関係を反映しやすいと思われる描画指標をいくつか選定し、スコアリング基準を作成した。しかし、筆者らが選定した描画指標に抑制群に顕著な描画特徴が見られなかったものもあるため、他の指標を用いることで新たな特徴が見つかる可能性がある。

引用文献

- 天貝由美子（1995）. 高校生の自我同一性に及ぼす信頼感の影響 教育心理学研究, 43, 364-371.
- DePaulo, B.M. (1983). Perspectives on help-seeking. In B.M. Depaulo, A. Nadler, & J.D. Fisher (Eds.), *New directions in helping: Help-seeking*. (Vol.2., pp.3-12.). New York : Academic Press.
- 後藤安代・廣岡秀一（2005）. 中学生が抱く「相談することに対する抵抗感」についての実態調査的研究 三重大学教育実践総合センター紀要, 25, 77-84.
- 橋本秀美（2009）. 動的学校画（KSD）. 高橋依子（監修）スクールカウンセリングに活かす描画法—絵にみる子どもの心. 金子書房, 16-20, 68.

- 平石賢二・小倉正義・安藤有美 (2005). 中学生・高校生における悩みの相談対象と心理的適応 日本教育心理学会総会発表論文集, 47, 636.
- 家成菜津子・石田 弓 (2016). 現代中学生の対人的疎外感の様相と「動的学校画」を用いたアセスメント 心理臨床学研究, 33 (6), 579-590.
- 石隈利紀・小野瀬雅人 (1997). スクールカウンセラーに求められる役割に関する学校心理学的研究: 子ども・教師・保護者を対象としたニーズ調査の結果より 平成6年度～平成8年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書(課題番号06610095)
- 岩瀧大樹 (2008). 中学生が抱える悩みおよび悩みに対する相談相手・相談抑制理由に関する研究—1. 昭和女子大学大学院生活機構研究科紀要, 17, 53-68.
- 加藤孝正 (1999). 動的家族画(KFD)の発達 臨床描画研究XIV, 30-42.
- Knoff, H.M., & Prout, H.T. (1985). *Kinetic Drawing System for Family and School: A Handbook*. Los Angeles, CA: Western Psychological Services. (ノフ, H.M.・プラウト, H.T. 加藤孝正・神戸 誠(訳). 学校画・家族画ハンドブック 金剛出版)
- 小針 誠 (2008). 中学生はスクールカウンセリングを利用しているのか?—心理主義化する現代日本社会における中学生の悩みとその相談先— 同志社女子大学 総合文化研究所紀要, 25, 26-40.
- 三上直子 (1995). S-HTP法 統合型HTP法による臨床的・発達のアプローチ 誠信書房
- 永井 智・新井邦二郎 (2005). 中学生における悩みの相談に関する調査筑波大学発達臨床心理学研究, 17, 29-37.
- 永井 智・新井邦二郎 (2007). 利益とコストの予期が中学生における友人への相談行動に与える影響の検討 教育心理学研究, 55 (2), 197-207.
- 永井 智・新井邦二郎 (2009). 中学生における友人に対する援助要請の統計的特徴—相談行動, 悩みの経験, 利益・コストにおける基礎的データの検討— 筑波大学発達臨床心理学研究, 20, 11-20.
- 新見直子・近藤菜津子・前田健一 (2009). 中学生の相談行動を抑制する要因の検討 広島大学心理学研究, 9, 171-180.
- O'Brien, R.O., & Patton, W.F. (1974). Development of an objective scoring method for the Kinetic Family Drawing. *Journal of Personality Assessment*, 38, 156-164.
- 落合良行・佐藤有耕 (1996). 青年期における友達とのつきあい方の発達の变化, 教育心理学研究 44, 55-65.
- Prout, H.T. & Celmer, D.S. (1984). School drawings academic achievement: A validity study of the Kinetic School Drawing technique. *Psychology in the Schools*, 21, 176-180.
- Prout, H.T. & Phillips, P.D. (1974). A clinical note: The Kinetic School Drawing. *Psychology in the Schools*, 11, 303-306.
- Sarbaugh, M.E.A. (1982). Kinetic Drawing-School (KD-S) Technique. *Illinois School Psychologists' Association Monograph Series*, 1, 1-70.

- 高橋依子 (2011). 描画テスト 北大路書房.
- 高木 修 (1997). 援助行動の生起過程に関するモデルの提案 関西大学社会学部紀要, 29 (1), 1-21.
- 田中志帆 (2007). 小・中学生が描く動的学校画の発達的变化 心理臨床学研究, 25 (2), 152-163.
- 田中志帆 (2009). どのような動的学校画の特徴が学校適応状態のアセスメントに有効なのか? — 小・中学生の描画からの検討 — 教育心理学研究, 57, 143.
- 田中志帆 (2011). 荒れている学級の動的学校画 — 小・中学生の描画特徴の比較・検討 —, 青山學院女子短期大學紀要, 65, 125-126.
- 田中裕望・窪田由紀 (2009). 中学生の友人関係と信頼感について 九州産業大学大学院臨床心理センター 臨床心理学論集 (4), 51-59.